

知識と理解を深める。

(2) 実施内容

実施日：平成28年12月26日（月） 8：15～16：45

参加者：1・2年希望生徒 42名

場 所：名古屋大学（名古屋市千種区不老町 TEL. 052-789-4157）

内 容：【講演①】〔物理系〕生物材料科学講座 土川覚 教授

農学部のあるましの紹介と近赤外光を活用した農産物の品質評価に関する研究事例等

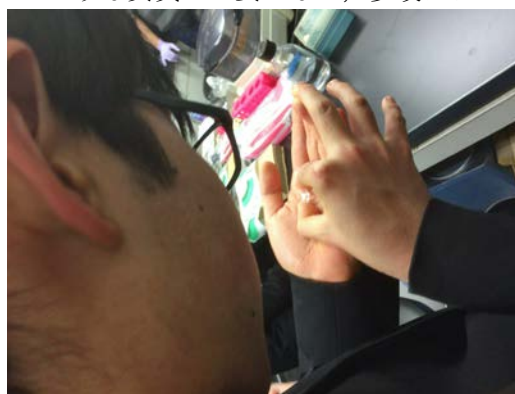
【講演②】〔生物系〕動物形態情報学講座 井上直子 講師

我々人間の食を支える家畜動物の問題について概説。家畜動物の効率的な生産には、繁殖技術の向上が必須であり、現在行っている哺乳類の生殖メカニズムについての研究を紹介。

(3) 評価と課題

名古屋大学は毎年一定数の者が進学しており、生徒にとっては進学の希望が多い大学のひとつだ。今回、本校のOBである二人の農学部の先生に講師を依頼した。土川教授からは、自分の学生時代の体験談を交えながら、どうして研究者を目指したか、研究者としてどのような資質が必要かなど、多岐にわたって話をいただいた。井上講師には、研究分野の講義に加え、現在大学では、英語による講義が広く行われ、実践的な英語力を身に付けておくことの重要性も話していただいた。

また、農学部内の幾つかの研究室をまわり、最先端の研究について研究者から話を聞いた。大学での実験および研究の様子を掴むことができた。今回の研修は、参加生徒にとって非常に満足度の高いものであった。来年度は、農学部以外の学部についても実施できるよう進めたい。



5. 数学基礎講座

(1) 目的

計算力強化を通して、数学力の向上を図り、数学への興味・関心を高める。

(2) 実施内容

対象： 1・2年生の希望者（第1回37名、第2回38名、第3回30名）

方法： 「16歳の教科書」の講師の一人であるKSプロジェクト代表取締役の鍵本聡先生を講師として招き、各回90分の演習・講義を実施した。

第1回：計算力の基本（中学まで編） 平成28年9月29日（木）

生徒は、小数の掛け算や分数の足し算など一見面倒な計算が、工夫をすることにより暗算でも簡単に答えを出せることを学んだ。演習を通して式の構造を見抜くことの大切さを認識し、様々な計算テクニックを習得した。

第2回：計算力の基本（中学・高校数学編） 平成28年11月10日（木）

生徒は、方程式や関数など中学・高校で扱う式の計算について、前回同様の巧みな計算手法を学習した。また、前回のアンケートに書かれた数学や勉強方法全般に関する生徒の質問に対して、講師からアドバイスをいただいた。

第3回：計算力の基本（外国の数学編） 平成29年1月17日（火）

生徒は、韓国、ロシア、台湾、中国など諸外国の教科書および約70年前の日本の教科書にある数学の問題に挑戦した。言葉は読めなくても、数学の記号やグラフは万国共通であり、そこから問題の意味を推測し興味をもって学習に取り組んだ。講義はすべて英語で行われ、生徒たちはその理解のために非常に熱心に聴講した。また、終了後は、講師が持参された外国の教科書に熱心に見入っていた。

(3) 評価と課題

各回とも多くの生徒が参加し、意欲的に学習した。毎回、講義終了後は多くの生徒が講師を取り囲み、熱心に質問していた。特に、第3回では、アメリカから来校していた6名のMS SMの生徒も参加し、英語を交えた解説が行われ、国際色豊かな講義になった。受講していた生徒の表情や感想から、数学に対する興味・関心は非常に高まった様子がうかがえ、本講座の目的は十分に達成できたと考えられる。

6. 数学発展講座

(1) 目的

大学の数学へとつながる高度な内容の数学に触れ、数学力・思考力の向上を図る。

(2) 実施内容

対象： 1・2年生の希望者

日時： 平成28年9月7日(水)、10月12日(水)、12月14日(水)

(3回とも本校SS教室にて90分間の講座を実施)

方法： 滋賀大学教育学部の神直人教授、長谷川武博准教授、篠原雅史講師に3回の講座の講師をお願いし、高校で学習する数学と大学で学ぶ数学の橋渡しになる講義を実施した。

第1回： 江戸時代の数学(長谷川先生)

第2回： 数列から見る無限(神先生)

第3回： 位相同型で見える世界(篠原先生)

(3) 評価と課題

3回の講座とも1,2年生あわせて約30名の生徒が参加し、講義に熱心に耳を傾けた。内容は、高校数学よりやや高度なものであったが、講師の問い掛けに応じ、前に出て積極的に自分の考えを発表する生徒もおり、意欲的に受講する姿が見られた。生徒にとって、身近な日常生活の中に存在する数学的事象に触れ、数学の奥深さを実感することができたことは、大きな教育効果があったものと思われる。今後も高校の学習内容にとどまらず、生徒の興味・関心を駆り立てるような取組をさらに充実させる必要がある。



C. 地域の理数教育を推進する中核的拠点校となる取組

ア. 仮説

近隣の高校と共同で大学・研究機関で行う研修会，研究発表会・交流会の実施，科学部の交流，さらに地域の小中学生を対象とした科学講座等の実施は，滋賀県東部・北部地域の生徒・児童の理数の学力を向上させ，本校が，地域の理数教育を推進する中核的拠点校となるという目標を達成できる。

さらに，これらの活動にSS部の生徒を主体的に取り組ませることは，生徒自身の科学的事象への理解を深化させ，探究心や思考力の育成に効果的である。

イ. 研究内容・方法・検証

地域の高校との合同研修会および合同発表会の実施や，コアSSH事業で培った手法等を活用し，小・中学生を対象とした科学講座等の実施を通して，本校生徒への効果を検証する。

I. 合同発表会 「彦根東サイエンスフェスティバル」

(1) 目的

滋賀県内の大学生・高校生が，自然科学系の部活動や課題研究で取り組んでいる研究の成果を発表し，議論や評価しあうことで，参加者の論理的思考力，プレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力を向上させる。また，質疑応答や相互評価を通して，研究レベルを向上させる。

(2) 実施内容

主 催：滋賀県立彦根東高等学校SSH推進室 共 催：滋賀県高等学校文化連盟自然科学部門

実施日：平成29年3月18日（土） 14：00～17：00

場 所：本校 体育館

参加者：滋賀県立彦根東高等学校（SSコースは全員および希望生徒）

滋賀県高等学校文化連盟自然科学部門加盟部

滋賀県内で自然科学系の課題研究に取り組んでいる高校生

滋賀県内大学の学生 引率教員 本校生徒の保護者

発表数：50発表程度（ポスターセッション）

※ 写真は昨年度のものである。



II. 外部発表

① SSH生徒研究発表会

日程：平成28年8月10日（水）・11日（木）

会場：神戸国際展示場

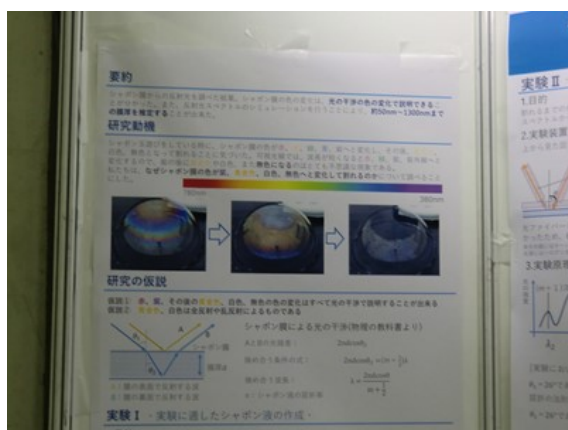
内容：講演，ポスター発表，代表校発表等

参加：本校より生徒80名（1年36名，2年40名，3年4名），教員4名が参加した。

3年生4名が，「シャボン膜間での気体の挙動」をポスター発表した。

評価と課題：

「SSH生徒研究発表会」が本年度も関西で開催され，地理的な好条件により発表する4名の3年生に加えて，1年生および2年生の全SSコース生を参加させることができた。特に1年生には，全国レベルの研究発表を早い時期に体験でき，今後行う課題研究での目標設定ができることを期待している。一方，2年生にとっては，来年の夏，出場したいと述べる生徒がいるように，現在の研究へのモチベーションの高揚に効果的である。



② 科学の甲子園滋賀県予選「サイエンスチャレンジ滋賀」への参加

日程：平成28年11月13日（日）

会場：滋賀県庁 参加：本校から2チーム12名が参加した。

評価と課題：

科学の甲子園滋賀県予選「サイエンスチャレンジ滋賀」に，本年度も2チームが参加した。しかし，予選突破を果たすことができなかった。是非，次年度は全国大会への出場を目指したい。

本年度は，学会での発表を行うことができなかった。時期的な問題もあるが，上位大会での研究発表を目標に内容の深化を促したい。

Ⅲ. 滋賀県立彦根東高等学校スーパーサイエンスハイスクール研究発表会

(1) 目的

スーパーサイエンスハイスクールとして、研究開発の内容を公開するとともに、意見交換を通して研究の推進に資する。

(2) 実施内容

日 程：平成29年2月15日（水） 9：30～14：30

会 場：滋賀県立大学 交流センターホール

対 象：高等学校教職員，県内中学校教職員，大学関係者，県教育委員会関係者，SSコース保護者，滋賀の教師塾生徒（教師を目指す大学生）等

参加者：134名

内 容：開会行事 課題研究発表（2年SSコース生徒，講評：滋賀県立大学工学部 教授 松岡純）
SSHの取組の概要報告・意見交換 閉会行事

(3) 評価と課題

本年度も、滋賀県立大学交流センターホールをお借りし、実施できた。十分な広報活動を行った結果、SSH運営指導委員6名をはじめ、全部で19名の大学関係者の参加があった。結果、質疑応答が活発に行われ、大学を会場に実施していることによる効果だと考えている。また、昨年度から、SSコースの1年生も参加させている。1月の校内発表会より研究内容や発表の仕方が向上した上級生を見ることは、1年生にとって大変有意義なことである。また、次年度の発表のイメージをもたせることもできた。

昨年度から、課題研究に対して、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価を導入している。今回、SSコース生、運営指導委員および大学関係者には、これを用いての評価をお願いし、結果を各班に戻した。

11グループの課題研究のうち、3グループが英語によるプレゼンテーションを準備していたが、聴衆の内容理解を優先して、今回は1グループのみが英語で行った。今後、MS・SM研修に参加する者は英語によるプレゼンテーションを準備する一方で、他の生徒は「彦根東サイエンスフェスティバル」に向けて、ポスター作成および発表準備に取り掛かる。



D. その他

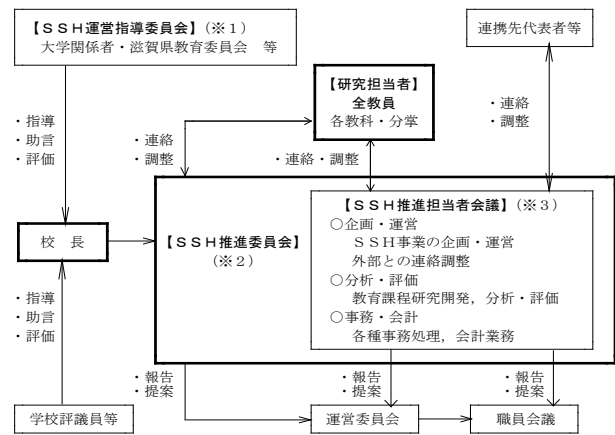
I. 本年度の校内研究体制

本校SSHの研究担当者は、非常勤講師を除く全教員とし、全教員の連携のもと事業を展開する。

事業を実施するにあたり、企画・運営・分析・評価および経理事務等を主に担当する専任分掌「SSH推進室」を設ける。校内組織として、SSH事業の方針についての意見集約の場とする「SSH推進委員会」

(校内教員の39%に相当)を組織して、年間に少なくとも3回の会議を開催する。また、各事業の実施前後には、関係学年主任・担任、関係教科主任・担当者とSSH推進室で構成する「SSH推進担当者会議」を開催して、事前準備と実際の運営、実施後のまとめ

と事業評価について検討する。また、昨年度より、「リーダーシッププロジェクト会議」を立ち上げ、学校全体が関わる事業を展開する中、本年度はLSP課題研究(全1年生を対象)の企画・運営を行った。(前述)



II. 中間評価を受けての改善および対応状況

一昨年度の中間評価でのご指摘は、次の3項目であった。

- ① SSH事業の主たる対象が理系全体ではなくSSコースの生徒44名であり対象が小さい。また、その取組の他のコース、科目への普及は不十分と考えられる。
- ② 課題研究の取組時期を少しずつ早めてきたことは効果的であると認められるが、さらに生徒が自ら主体的に取り組むための工夫が期待される。
- ③ SSH事業を継続実施してきたことの検証と改善が十分に行われているとは言い難い。また、これまでの成果が可視化されていない。

これらのご指摘を受け、本年度、改善を実施したもののなかで、代表的なものを次に示す。

[1] ①に対する取組

- ・従来、SSコース生を対象にした課題研究の実施により、生徒の様々な能力が向上されるという有用性が証明されている。この有用性を全校生徒に広げる目的で、「リーダーシッププロジェクト会議」が中心になって、第1学年生全員を対象とする「LSP課題研究」を実施した。
- ・SSコース生に対しては、1年次後半からの「課題研究」につなげるべく、「LSP課題研究」を「プレ課題研究」と位置づけ実施した。
- ・全校生徒を対象とする事業および希望者を対象とする企画を増やした。

[2] ②に対する取組

- ・本校の課題研究の取組では、テーマ設定から研究の進め方に至るまで、生徒の自主性を尊重して行っている。本年度は、多くの課題研究で、生徒自らの働きかけにより、外部(大学や研究機関の研究者)からの指導が実現した。次年度は、よりシステム化に努め、内容の深化を図りたい。

[3] ③に対する取組

- ・卒業生の情報収集に努め、事業の検証を行う目的で、本年度始めに第1回の追跡調査を行った。「現在携わっている研究及び仕事」「将来への展望」「東高時代のSSHの取組がどう影響しているか」「後輩に向けてのメッセージ」等の質問により卒業生のデータベースを構築できた。また、その結果を本校HPに掲載し、成果の視覚化を実施した。今後、卒業生が現本校生に関わるSSH事業を増やし、縦のつながりの強化を図りたい。

第4章 実施の効果

I. 「化学基礎」, 「生物基礎」の授業について

これらの基礎科目では、本校が今までのSSH研究開発で培った指導法および成果を実践し、基礎の理解と探究の技法の習得を目指している。自然科学を学ぶ上での基礎的事項、実験や観察の手法ならびに探究活動は、理系学部へ進学する生徒だけでなく、文系学部へ進学する生徒にも、必要不可欠なものとして位置づけている。

第1学年全員に「化学基礎」と「生物基礎」を履修させ、その効果を検証した。

実験実習を増やし、発展的な内容を取り入れ、さらには授業展開を工夫するなど行った結果、昨年度と同様にそれぞれの項目において高い値を示した。ただ、探究心の向上においては、SSクラスと一般クラスの間には昨年度以上の大きな差があった。その差を小さくするような授業での工夫が必要である。

※ 肯定的な回答の割合 () は昨年度の数値

質問項目	SSクラス	一般クラス
(1) 理科の学習に対する興味・関心は増しましたか。	94% (100)	64% (70)
(2) 理科の実験・実習に対する興味・関心は増しましたか。	100% (100)	65% (78)
(3) 理科の授業内容について、理解できましたか。	86% (99)	76% (77)
(4) 理科の授業を通して、理科実験の手法や基本操作を習得できましたか。	97% (100)	89% (86)
(5) 理科の授業を通して、真実を探って明らかにしたい気持ち(探究心)は増しましたか。	97% (95)	51% (57)

II. 学校設定科目「SS数学I・II・III・B」

「SS数学I」では、第1学年生全員を対象に「数学I」の内容に「数学II」の内容の一部を取り入れることで、体系的でより広がりのある学習指導を実践した。効率的に、しかも効果的に学習が進むことにより、理解が深まると考えている。結果、そのような傾向が表れているが、すべての項目で昨年度よりポイントを下げている。次年度での改善が必要だ。

「SS数学II」, 「SS数学B」では、第2学年理系生徒を対象に、「数学II」の内容に「数学III」の内容を、「数学B」の内容に自然科学への応用を組み入れ、一部はさらに高度な内容まで発展させて数学の面白さを学び取れるようにした。ほぼすべての質問項目で、昨年度に比べ、より効果的に作用していることがわかる。仮説を裏付ける結果となった。

第3学年理系生徒を対象とする「SS数学III」では、「数学III」の内容に加え、大学で学ぶ数学への接続として「微分・積分」の分野と、「複素数平面」, 「式と曲線」の分野を総合的に学習するようにした。さらに、発展的な内容である「微分方程式」, 「曲線の長さ」を扱い、微分・積分の内容をより深めながら発展させた学習を行った。やや高度な内容であるため、際立った効果を示したと言い難い分野はあるが、数学的視野を広げることにはつながったといえる。評価もほぼ昨年度と同様であった。

○ 「SS数学I」について

※ 肯定的な回答の割合 () は昨年度の数値

質問事項	SSクラス	一般クラス
(1) 「複素数と方程式」を学習したことで、「2次方程式」についての理解が深	80% (95)	70% (80)

まりましたか。		
(2)「図形と方程式」を学習したことで、「方程式」の概念とその応用についての理解が深まりましたか。	83% (87)	68% (80)
(3)数学Ⅰの内容に発展的な内容として数学Ⅱの一部取り入れて行った授業について、どう思いますか。	77% (97)	81% (87)

○「SS数学Ⅱ」について ※ 肯定的な回答の割合 () は昨年度の数値

質問事項	SSクラス	一般理系
(1)「数学Ⅲ」の内容である、様々な関数の微分や微分を用いた問題を考えることで、微分に対する興味・関心が高まりましたか。	77% (78)	74% (65)
(2)「数学Ⅲ」の内容である、様々な関数の微分や微分を用いた問題を考えることで、「数学Ⅱ」の内容の微分の理解が深まりましたか。	91% (81)	87% (73)
(3)「数学Ⅱ」よりふみこんだ「数学Ⅲ」の内容を取り扱うことで、数学の学習に対する意欲が高まりましたか。	80% (72)	71% (69)

○「SS数学B」について ※ 肯定的な回答の割合 () は昨年度の数値

質問事項	SSクラス	一般理系
(1)「数学B」の発展的な内容である「座標空間における平面の方程式」、「直線の方程式」を学習することにより、「ベクトル」への興味・関心は高まりましたか。	91% (69)	65% (58)
(2)「数学Ⅱ」の内容である媒介変数表示や極座標を学習することで、数学Bの「ベクトル」の理解が深まりましたか。	91% (69)	57% (52)
(3)「数学B」よりふみこんだ発展的な内容を取り扱うことで、数学の学習に対する意欲が高まりましたか。	77% (76)	67% (62)

○「SS数学Ⅲ」について ※ 肯定的な回答の割合 () は昨年度の数値

質問事項	SSクラス	一般理系
(1)「数学Ⅲ」の「微分・積分」の分野と、「複素数平面」、「式と曲線」の分野を総合的に学習し、融合することにより微分・積分への興味・関心が高まりましたか。	52% (65)	53% (59)
(2)「数学Ⅲ」の発展的な内容である「微分方程式」、「曲線の長さ」を学習することにより、微分・積分の内容の理解が深まりましたか。	65% (61)	61% (54)
(3)「数学Ⅲ」よりふみこんだ発展的な内容を取り扱うことで、数学の学習に対する意欲が高まりましたか。	63% (61)	63% (60)

Ⅲ. 学校設定科目「SSI・II・III」

「SSI・II・III」はSSコース生徒を対象に、広範囲の科学領域を学んで視野を広げ、その中で、興味・関心に基づいた課題研究を行う。基礎知識に基づき、専門的で高度な内容を学習し、科学技術系人材に必要な能力を培う目的で設定している。

まず、科学研究を行う上で、必要な「数学力」(科学的思考力)・「国語力」(論理的読解力)・「英語力」(実践的英語力)の基礎の養成、伸長、発展を、「SSI」でのプログラムのひとつに位置づけ、年度後半のLSP課題研究(「プレ課題研究」)および次年度の課題研究を見据えて実施した。各力を育成する事業は、数学

科、国語科、英語科の教員がそれぞれ担当し、各教科で作成したオリジナル教材を用いて行った。98%を越える生徒がその意義を評価している。

さらに「SS I」では、科学への興味・関心を高め、最先端の研究活動に触れる機会として、様々な校外研修を行っている。研修では、大学教員等の指導により、実験・実習などの体験的な活動を多く行うようにしている。ほぼすべての項目で、前年度を上回る評価が出た。特に、「自分が言いたいことを英語で説明することができましたか」という質問に対して、94%（昨年度 77%）が評価している。一方、「発表に対して質問する力とそれに回答する力」については、77%（昨年度 82%）となった。昨年度より、各研修での質問の数が少ないことからわかる結果だ。質問力をつける工夫、たとえば、問題意識をもち研修に臨む姿勢等の育成を次年度の課題とする。年度後半からは、課題研究のテーマ設定に向けての取組を行った。次年度の「SS II」において、早い時期から研究がスタートできるようにした。

「SS II」においては、昨年度より「数学力」・「国語力」・「英語力」のウェイトを低くし、課題研究を含めた課題発見能力・問題解決能力の育成を中心に据えた。課題研究は、1～5名で構成する班によるもので、生徒の自主性を尊重して実践させている。本年度は、外部機関（大学および研究所等）からの指導を仰ぐ班が多く、内容の深化を目指し、外部からの指導を加えるシステムへのきっかけができた。アンケート結果から、今までと同様に、課題研究を通して多くの力が育成できていることが検証できた。特に、研究内容を英語でまとめる力は、本年度 83%（昨年度 61%）が評価し、大幅に改善された。MS SMの来校に合わせる形で、実践的な演習が増えた効果だと考えられる。一方、課題研究を英語で説明する力（実践的な英語力）は、昨年度のより大幅に改善された（本年度 74%（昨年度 61%））が、他の項目と比べてまだ低く、次年度に向けての課題となる。MS SMとの連携関係が3年目を迎え、2年SSコース生がその中心として連携活動を行う仕組みが定着しつつある。特に、本年度のMS SMからの来校では、課題研究に係る充実した交流ができた。ただ、英語による質疑応答をスムーズに行えるまでには至っていないが、積極的に英語を使おうとする姿勢が現れてきた。実践的な英語力の向上は、個人の英語へのモチベーションに大いに関わると考えられ、日常の英語の授業および生徒自身の余暇での取組が重要である。

「SS III」では、課題研究のまとめとして研究論文作成に臨んだ。アカデミックライティングに関わるガイダンスを行った後、各班が研究成果を日本語の論文作成、さらには英語による論文作成へと作業に取りかかった。英語による論文作成は、課題研究に絡めた英語力の育成のまとめとしている。アンケート結果をもとに3年間の取組を検証すると、SSクラスと他の理系クラスとでは、多くの能力の育成において差が表れた。特に、「国際性」、「プレゼンテーション能力」ならびに「科学技術への興味・関心」の項目が顕著である。今後は、他の理系クラスへのはたらきかけを強化したい。

○「SS I」についての生徒アンケート結果 ※ 肯定的な回答の割合（ ）は昨年度の数値

質問事項	回答
1 今年1年間の学習やSSH事業を通し、科学技術に関する興味・関心・意欲は増しましたか？	97%(97)
2 水曜6限の「SS I」では次の能力を伸ばすことを目標としてきました。この1年間でどれくらい増した（できた）と思いますか？	
(1) 身近にある事象の数学的考察や数学の発展的な話題について学ぶことによる、数学的な創造力、考え方	89%(82)
(2) 身近にある事象の数学的考察や数学の発展的な話題について学ぶことによる、数学的な直感力	77%(74)

(3) 文章を論理的に読み取る力	89%(79)
(4) 日本語で書かれた文章の内容を要約する力	77%(72)
(5) 日本語で発表する力・表現力	77%(74)
(6) 発表に対して質問する力とそれに回答する力	77%(82)
(7) 科学に関する英語の語彙・表現は増えましたか	77%(72)
(8) 自分が言いたいことを英語で説明することができましたか	94%(77)
(9) 相手の英語を聞いて、相手が伝えたいことを理解することができましたか	94%(82)
3 2 でたずねたような取組についてどう思いますか。	
(1) 2. (1)(2)のような力(数学力)を高める取組について	94%(90)
(2) 2. (3)~(6)のような力(国語力)を高める取組について	100%(97)
(3) 2. (7)~(9)のような力(英語力)を高める取組について	100%(100)
4 SSコースに入ってよかったですか?	97%(100)

○「SSⅡ」についての生徒アンケート結果 ※ 肯定的な回答の割合 () は昨年度の数値

質問事項	回答
1 2年間の高校での学習やSSH事業を通し、科学技術に関する興味・関心・意欲が増しましたか。	100%(93)
2 水曜5・6限の「SSⅡ」では、以下の力を伸ばすことを目標としてきました。この1年間でどれくらい力が増したと思いますか。	
(1) 日頃の授業とは違うアプローチをしたことによって、数学に関する興味・関心	91%(80)
(2) 数学においてパソコンソフトを用いたことにより、発展的な内容の理解	74%(76)
(3) SSⅡでの数学力の授業によって、数学的思考力	91%(90)
(4) 論理的思考力(論理的な文章の読み取り)	94%(88)
(5) 理科系小論文を理解する力(図表の分析と表現)	86%(85)
(6) プレゼンテーション能力(日本語で発表する力・表現力)	97%(93)
(7) 質疑応答する能力(内容を短時間で把握し、質問・回答する力)	83%(78)
(8) 課題研究を英語で説明したりすることで、実践的な英語力	74%(61)
(9) 課題研究の要約を英語で表すことによって、英文によるアブストラクトの書く力	83%(61)
(10) 課題研究をとおして、探究心(知らないことを調べ探ろうとする姿勢)	97%(98)
(11) 課題研究をとおして、ものごとを深く考えようとする姿勢	97%(98)
(12) 課題研究をとおして、調べたこと、考えたことをまとめる力	94%(100)
(13) 課題研究をとおして、発表する力(プレゼンテーション力、コミュニケーション能力)	89%(93)
(14) 課題研究に取り組んだことは、あなたにとってどうでしたか。	97%(100)
3 SSコースに入ってよかったですか。	100%(100)

○3年SSコース生が3年間のSSHでの取組を受けて ※ 肯定的な回答の割合 () は昨年度の数値

質問事項	回答
1 3年間の高校での学習やSSH事業を通し、科学技術に関する興味・関心・意欲がましましたか。	100%(90)
2 SSコースに入ってよかったですか?	100%(100)